

# 弘法さんかわら版

発行編集部

大塚耕平事務所

☎052-757-1955

Kouhei@oh-kouhei.org

日泰寺はもともと日暹寺(にっせいせんじ)

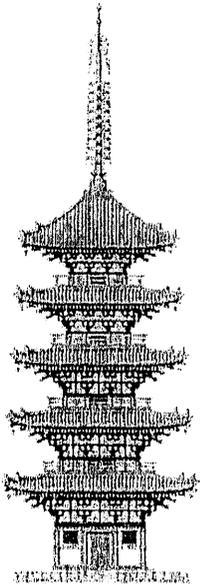
皆さん、こんにちは。暑い暑い夏も過ぎ、九月の中旬になりましたが、いかがお過ごしですか。さて、日泰寺にお釈迦さまの骨(仏舍利)ぶっしやりが納められていること、その仏舍利は一八九八年(明治三二年)にインドのピプラーワーいところで見されたものであること、タイ王室がその仏舍利を日本に寄贈してくださったこと、仏舍利を祀るお寺をここ名古屋市に建設することが仏教界の相談で決まったことなどを、かわら版創刊号でお伝えしました。

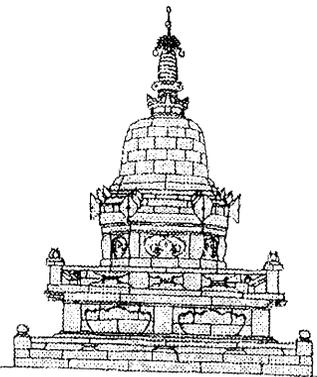
ちなみに、日本への寄贈が決まった頃のタイは「シヤム」と呼ばれていたことから、当時は覚王山日暹寺(かくおうさんにつせんじ)と言ったそうです。

(「せん」という字は、「シヤム」国の漢字表記です)。一九三二年(昭和七年)、「シヤム」の国名がタイに変更されたことから、一九四一年(昭和十六年)三月三十一日から覚王山日泰寺(かくおうさん・にっさいじ)と改称されて、現在に至っています。

どうして名古屋市に？

でも、どうしてここ名古屋市がお寺の候補地となったのでしょうか。ちよつと調べてみました。一九〇〇年(明治三三年)六月十五日、タイのワットポー大寺院で仏舍利分与の式典が催され、日本から真宗大谷派の光演師(句仏上人)ほか四名が奉迎正使として出席しました。その後、正使一行は仏舍利とともに六月十九日に帰国の途につき、七月十一日に長崎に到着しました。同十九日には仮奉安所に決められていた東山妙法院に納められました。さて、ここからが大変だったようです。





仏舎利奉安塔  
高さ15.7m、基壇10m四方

その時点では仏舎利を正式に納める**塔廟**（**覚王殿**）**II**「**覚王**」はお釈迦さまの山号）の建設地は決まっています。候補地として話題になったのは、主に東京、京都、遠州三方ヶ原などですが、各地で寄進を申し出る方々が続出し、ほかに候補地はあったようです。

名古屋市が候補地になった経緯は正確には確認できていませんが、覚王殿の設計図製作を請け負ったのが名古屋市の**伊藤満作氏**であったことと関係があるようです。帝国仏教会は、正使一行がタイに渡っている間に伊藤氏に設計図製作を依頼し、仏舎利が長崎に到着した翌日、七月十二日には縮尺一五〇〇分の設計図（第一稿）が完成していたといえます。

仏舎利到着後、一年以上経っても覚王殿建設地は確定せず、日本のタイ公使館の**外山義文**領

事がそのことをタイ国王に報告したところ、国王は「まだ地所も決まっておりませんか、早く建設資財を寄贈したいと思っておりますのに・・・」と大変ご機嫌が悪かったとのことです。

**つづきは次号のお楽しみ!!**

困った外山公使は、一九〇一年（明治三四年）十一月二十六日、**帝国仏教会**の村田寂順師（会長）と前田誠節師（副会長）に、「二個人の約束と一国の国王との約束とでは重さが異なることをよくよく考慮し、日本仏教徒の恥辱にならぬよう、早急に対処されたい」という厳しい書簡を送りました。さて、このつづきは次号のお楽しみです。ご期待ください。

・参考資料 「菩提樹仏教夜話」

（京都紫雲寺）

★ **覚王山秋祭 十月二十六日（土）・二十七日（日）開催決定!**

真夏の夏祭に続き、覚王山に「秋祭」がやって来ます。芸術の秋、食欲の秋を日泰寺参道で満喫してください。